三重大学教育学部研究紀要　第71巻　人文科学（2020）87－105頁

愛知県稲沢市における「国府宮はだか祭」の存続形態

藤井　絵理*・磯野　巧**

Sustainable Forms of the ‘Konomiya Hadaka Matsuri’ in Inazawa City, Aichi Prefecture, Japan

Eri Fujii and Takumi Isono

要　旨

本研究の目的は，愛知県稲沢市における国府宮はだか祭の存続形態を，当該地域の社会的背景を踏まえつつ，祭礼と諸主体との関係性を分析することを通して明らかにし，併せてその存続要因を導出することである。国府宮はだか祭は神事として現在まで存続する伝統的な祭礼であり，その運営に直接携わっているのは国府宮神社のみである。しかし，その規模の大きさから，行政や民間企業，住民組織など様々な諸主体が能動的に活動し関わりあっていた。国府宮はだか祭の存続要因については，年に一度の非日常的な経験を享受することのできる国府宮はだか祭の特殊性，国府宮はだか祭が稲沢市を代表する重要な地域資源とみなされているその象徴性，文化財教育に積極的に取り組む稲沢市の地域性，以上三点を指摘することができた。

キーワード：祭礼，組織運営，担い手，国府宮はだか祭，稲沢市

1. はじめに

1.1　研究課題

高度経済成長期以降，都心の過密化や交通システムの整備などにより，郊外地域の人口増加率が中心市のそれを上回り，郊外化が日本の大都市圏で見られるようになった。そのため，大都市近郊地域では郊外化の進行に伴う急激な人口流入によって住民構成が多様化し，経済・社会・文化面などで様々な変動が起こった。このような変動は，伝統的な文化の継承を困難にしており，それらを継承していくための枠組みの構築が急務となっている。（佐藤，2016）

本稿では伝統的な文化の例として祭礼を取り上げる。柳田（1956）は祭礼を「見物というものが集まってくる祭」と位置付けており，これまでに地理学，社会学，文化人類学，建築学，民俗学など幅広い分野から研究が蓄積されてきた。地理学に関する既往研究を俯瞰すると，たとえば渡辺（1999）は栃木県那須郡烏山町を事例に，近世の関東の一城下町で時代が進むにつれて祭礼の形態や行われる場所，関与する人々などが変容していったことを明らかにした。また，遠城（1992）は日常と博多祇園山笠での内部と外部からの各担い手の対立関係から都市空間における「共同性」の構成を見出し，都市の近代化により人々が従来の「共同性」を回復させていることを指摘した。ほかにも，新田（2000）は茨城県石岡市を事例として，都市域拡大に伴って常陸総社宮例大祭の参加形態に差異が生じたことを明示した。しかしながら，祭礼の継承そのものに焦点を当てた研究は僅少である。この点については，都市中心部の人口減少に伴い祭礼の神輿の担い手が町内住民から外部主体へと変化したことを指摘した平（1990）があるものの，祭礼運営の全体像を捉えるまでに至っていない。

混住化が進展した都市圏において，祭礼の継承や担い手確保を検討するには，祭礼を支える地域の社会構造や組織運営全体を把握することが重要であると考えられる。これらの課題を受けて，近年では祭礼の運営主体に着目し，その継承のあり方を論じた研究が蓄積されるようになった。たとえば，卯田・阿部（2015）は長野県佐久市旧望月町における「榊祭り」を事例として，過疎化による担い手不足のため維持が困難となった榊祭りを存続させるために，自治体がイベントとして要素を加え，祭事と明確に区分したことで，担い手がこれまでと同様に活動を行うことができたと述べている。そして，費用や人員確保など直接的な課題と町民の担い手としての自覚の醸成という間接的な課題を克服して祭りが存続されてきたことを明らかにした。また，都市圏における祭礼の研究として，佐藤（2016）は京都祇園祭における山鉾行事を事例とし，都市祭礼の運営基盤を社会・経済・場所的側面から分析した。

*稲沢市役所　　**三重大学教育学部社会科教育コース

その結果，山鉾を持つ都心の町内は人口や土地利用に差異があり，山鉾行事の運営基盤はそれに伴い再構築されたことがわかった。さらに，都市圏の祭礼の中でも，大規模に観光化されていない地方都市の祭礼を扱った研究として坂本ほか（2018）がある。この研究では，茨城県土浦市における土浦八坂神社祇園祭を事例として，社会構造の変容に対する都市祭礼の変化を明らかにした。土浦祇園祭は担い手不足や祭礼費用の工面などの諸課題が深刻化しており，出し物の転換や外部からの担い手確保といった対応を講じることで祭礼が変化し，それが新たなネットワーク構築に寄与していることが示唆された。

これらの研究を通して，伝統的な祭礼の継承について考える上で，祭礼の形式や運営基盤の変化によって担い手が変化しながら祭礼が存続されていることが見出された。しかし，伝統的な祭礼の継承を社会動態との関わりから論じた研究は未だ十分とは言えない。さらに，既往研究で祭礼の運営組織や直接的な参加者に焦点を当てた研究が見られるものの，間接的に祭礼に関わっている諸主体の活動についても言及している研究はほとんど見られない。そのため，現在多くの伝統行事が従来の意味を失い，消滅したり縮小したりしている中で，従来の意味を失うことなく存続されている祭礼の存続形態を，祭礼と諸主体との関わりに着目しながら明らかにする必要がある。

そこで本研究では，愛知県稲沢市の国府宮神社で行われている伝統的な祭礼「国府宮はだか祭」を取り上げ，当該地域の社会背景を踏まえつつ，祭礼とそこに関わる諸主体との関わりを分析することを通して，祭礼の存続形態を明らかにし，そこから祭礼が存続してきた要因を導き出すことを目的とする。

調査方法として，稲沢市史や国府宮はだか祭に関する資料収集，国府宮はだか祭に関わる諸主体への聞き取り調査，裸男経験者や地元住民などへのアンケート調査を実施した（2018 年 6 月～12 月）。聞き取り調査については，国府宮神社，鉄鉾会（神男の OB 組織）など直接祭礼にかかわる主体や，間接的に祭礼に関わる稲沢市役所経済環境部商工観光課，稲沢市教育委員会生涯学習課，稲沢市観光協会，地元住民などにそれぞれの活動実態を訊ねた。アンケート調査に関しては，裸男や地元住民がどのような意識で祭礼に関わっているかを訊ねた。

研究手順は以下の通りである。2 章では国府宮はだか祭の概要と歴史的変遷について記述する。3 章では国府宮はだか祭実行委員会に所属する行政や各住民組織の活動について言及し，国府宮はだか祭の運営基盤について分析する。4 章ではアンケート調査をもとに国府宮はだか祭に関わる主体がいかなる意識でそれに関する諸活動に臨んでいるかを述べる。そして 5 章では，2～4 章を踏まえた上で，国府宮はだか祭の存続形態を検討し，さらに存続に関わる諸要因を探っていく。

1.2　研究対象地域

稲沢市は愛知県北西部に位置し，一宮市，清須市，あま市，愛西市，岐阜県羽島市，海津市と隣接している（図 1）。2018 年の人口は 137,052 で，年齢構成は全国平均とほぼ変わらないが，65 歳未満人口の割合が若干高くなっている。なお，現在の稲沢市は 2005 年に旧稲沢市，旧祖父江町，旧平和町が合併して誕生した。

稲沢市は，明治期には稲作や綿花といった商品作目の生産が盛んな農業地域であったが，昭和初期には繊維業を中心とした大規模工場が相次いで立地するなど工業地域としての性格を帯びるようになった。1955 年に中島郡の 4 市町（稲沢町，大里村，千代田村，明治村）が合併して稲沢町が発足すると，1950 年代後半より住宅団地の建設や都市区画整理に基づく新しいまちづくりが進められた。そして，市制施行により稲沢市となった 1958 年以降，さらなる公共施設の充実など都市基盤整備が展開するようになった。稲沢市の人口推移をみると，市制施行以降ほぼ一過して増加傾向にあり，とくに 1960 年から 1970 年代にかけて伸び率が大きくなっている（図 2）。稲沢市は名古屋市から約 10km の位置にあり，JR 東海道本線および名古屋鉄道で 10 分程度の時間距離にある。ゆえに交通利便性が高く，稲沢市は名古屋大都市圏の一部としての性格が強いことから，人口減少はほぼみられない状況にある。

稲沢市の主要観光資源として，尾張大国霊神社（以下，国府宮神社），祖父江善光寺東海別院，矢合観音といった史跡や文化財，国営木曽三川公園ワイルドネイチャープラザなどが挙げられる。しかしながら，年間 100 万人以上の入込客数があるのは国府宮神社のみである [1)]。また，愛知県の市町村別観光入込客数をみても，稲沢市は 17 位と目立たず，県内における主要観光目的地であるとは言い難い状況にある。このように，稲沢市は広域的な集客圏を形成するような観光資源に乏しく，ゆえに宿泊施設の立地件数も都市の規模に比して少ない。そのなかで，国府宮はだか祭はゆるキャラのモチーフになったり（図 3），市や観光協会などの Web サイトに写真やイラストが使われたりと，稲沢市を象徴する地域資源のひとつとして認識されつつある。ほかにも，稲沢市内の公共施設やマンホールなど各所に国府宮はだか祭のイラストが描かれていたり（図 4），国府宮はだか祭当日は市内の小中学校や商店が休業したりするため，国府宮はだか祭は稲沢市民にとって非常に身近な存在であることが示唆される。

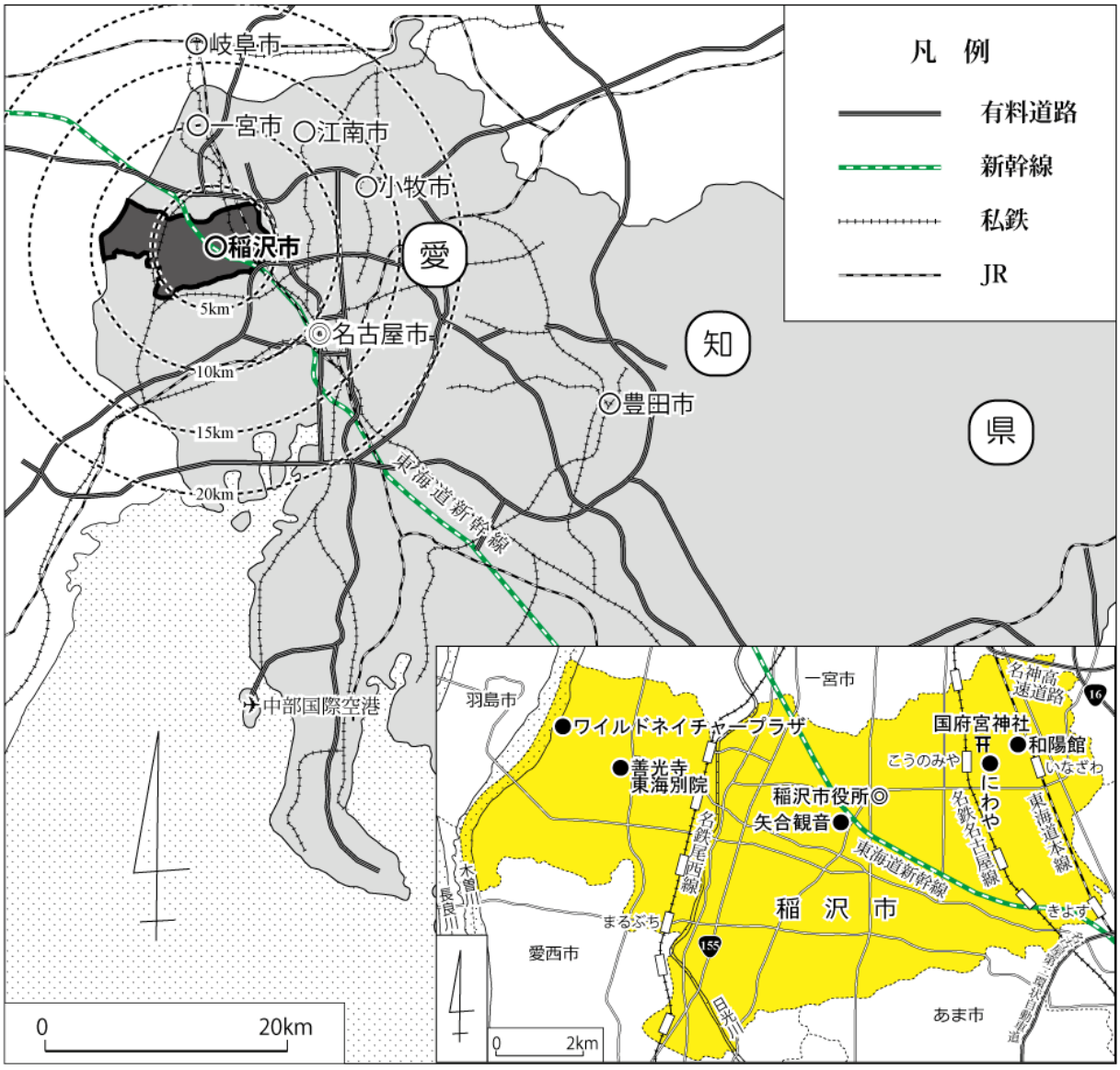


図１　研究対象地域

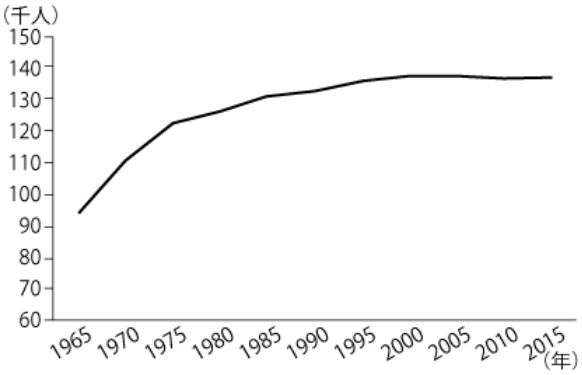


図２　稲沢市の人口推移（1965－2015 年）
（国勢調査により作成）

図３　JR 稲沢駅に設置された稲沢市のゆるキャラ「いなッピー」
（2017 年 12 月　藤井撮影）

図 4　小正市民センターのエレベーターに描かれた国府宮はだか祭のイラスト
（2018 年 2 月　藤井撮影）

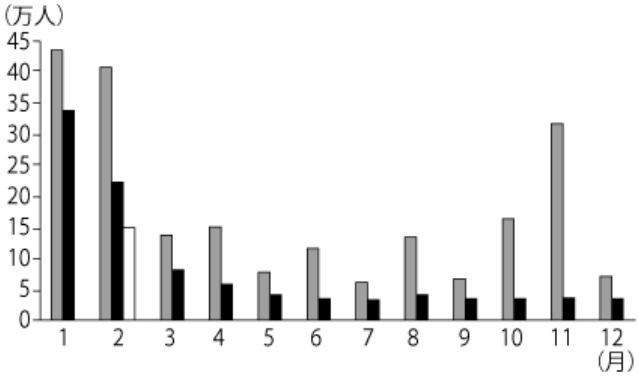


図 5　国府宮神社の月別参拝者数（2016 年）
（稲沢市経済環境部提供資料により作成）

2. 国府宮はだか祭の動態

2.1　国府宮はだか祭の概要と歴史的変遷

本節では，稲沢市編（1968）や新修稲沢市史編纂委員会編（1991），桜井（2008），尾張大國霊神社国府宮の Web サイト[2]を基にして，国府宮はだか祭の概要とその歴史的変遷について概説する。

国府宮はだか祭は，正式には儺追神事といい，毎年旧暦の 1 月 13 日に稲沢市の国府宮神社で開催されている[3]。この祭りは，儺負人[4]に触れて厄を祓うために，下帯姿の裸男たちがもみ合いになる奇祭として知られており，1984 年には愛知県の重要無形民俗文化財に登録された。国府宮神社の月別の参拝者数をみると，1 月と 2 月の参拝者が他の月に比べて圧倒的に多くなっているのがわかる（図 5）。1 月は初詣などがあり多くの人が神社に訪れるため，参拝者の数は増加する。また，同年の国府宮はだか祭の日の参拝者数を比べると，2 月の参拝者数は約 22 万人で国府宮はだか祭は約 15 万人であり，2 月の国府宮神社の参拝者数のうち 3 分の 2 以上は国府宮はだか祭の日に訪れていることがわかる。以上より，国府宮はだか祭は一定の知名度を有していると判断できよう。

次に，国府宮はだか祭の歴史について説明する。なお，本節の中では歴史的変遷をたどるにあたり，神事としての「国府宮はだか祭」を扱うため，以下では「儺追神事」と表現する。767 年に天皇から五穀豊穣と万民の幸福を祈願するため吉祥天悔過を行う勅令が出され，国分寺に加え惣社である国府宮神社でも行われたことが儺追神事の起源とされる[5]。儺追神事が始められた当初と現在とで，儺追神事は大きく異なっており，儺負人（神男）の選考の仕方が変化し，裸男たちのもみ合いが見られるようになった。儺追神事で最重要人物である儺負人は，もともとは「儺負人捕り」と呼ばれ，無差別に捕えられていた。しかし，1743 年に一宮村との騒動により尾張藩から祭儀改易の命令があり，儺負人はその年の恵方の村落から雇うようになった。そして，明治維新後には儺負人は志願者による奉仕となった。また，裸男たちのもみ合いが見られるようになったのは江戸時代後期からと推測されている。なぜこのような姿が見られるようになったかはっきりとしたことは明らかになっていないが，儺負人捕りの様子や寒参りのような赤裸々姿が融合した形だと考えられている。1868 年から 2007 年までの儺追人の出身地をみると，出身地の大半は稲沢市であり，一宮市，清須市，北名古屋市，名古屋市など他の地域でも稲沢市近隣であることが多い（図 6）。儺負人は誰でもなれるわけではなく，儺負人の OB 組織である鉄鉾会の推薦がいるため，儺負人になるのは稲沢市やその近隣地域出身者が中心なのではないかと考えられる。

ほかにも，神事としての形式が大きく変化したこととして，儺追神事の関連行事の一つである大鏡餅奉納が挙げられる。まず，明治初期から 5～6 俵前後の鏡餅が有志者によって神社に供えられていた。その後，1940 年頃から 30～40 俵程の大鏡餅となり，以後，中島郡（当時）の町村が交代で奉納する慣例と大きさを競う気風ができた。そして，1955 年頃以降中島郡外の町村からも奉納希望の声が高まったため，中島郡という枠が外され，奉納地の名誉のために奉納される鏡餅の形状はますます大きくなった。また，大鏡餅奉納は神事の当

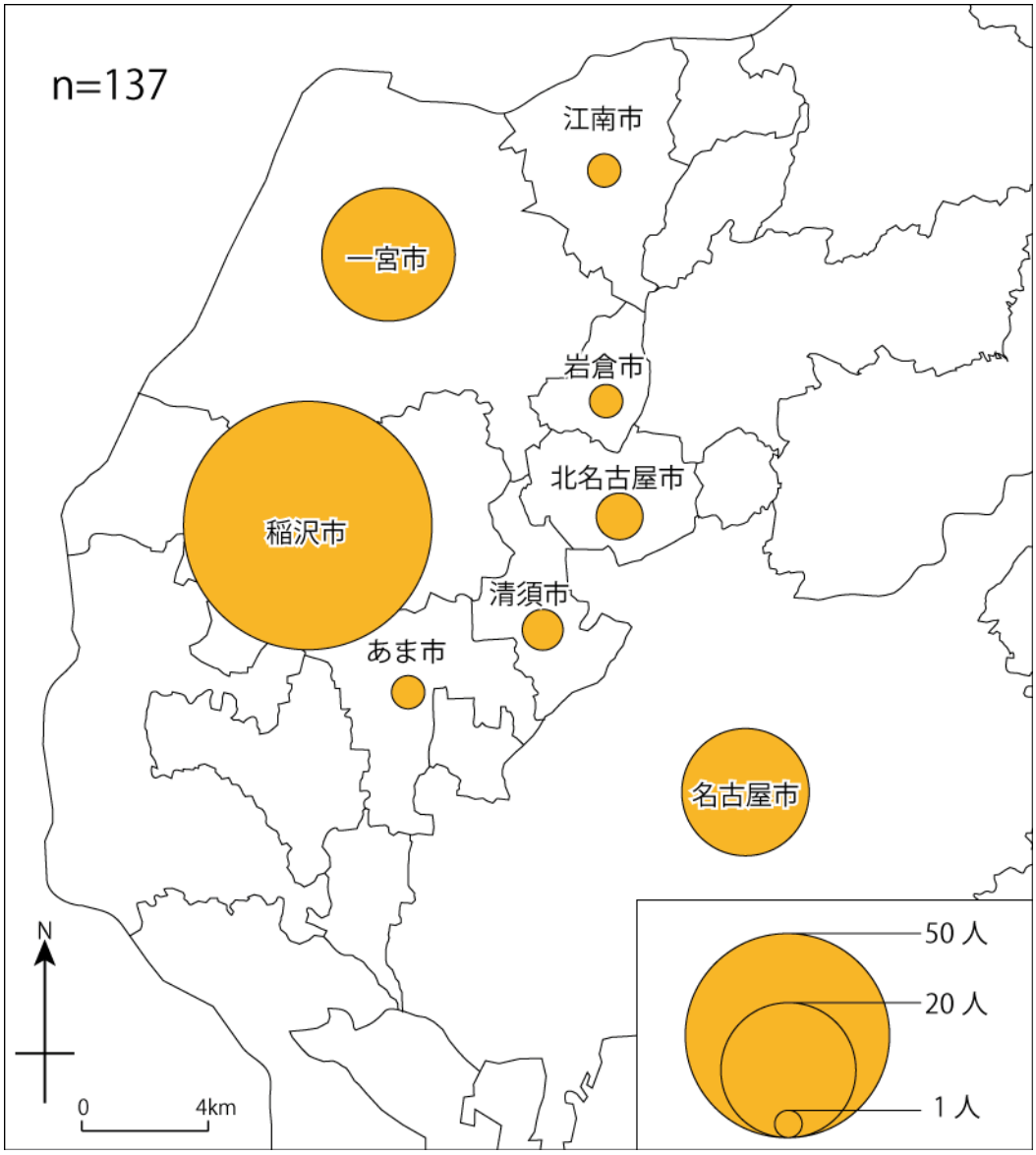


図 6　儺負人の出身地（1868－2007 年）

（桜井（2008）を基に作成）

日に行われていたが，1955 年奉納中に名古屋鉄道で踏切事故があったため，事故防止のため前日に行われるようになった。大鏡餅の奉納地について見ると，1955 年はほとんどが旧中島郡に属していた現在の稲沢市と一宮市の地域に偏っているが，1955 年以降は尾張地方のかなり広範囲の地域が大鏡餅奉納を行っていることがわかる（図 7）。そのため，尾張地方では儺追神事（国府宮はだか祭）の存在はある程度知れ渡っていると思われる。

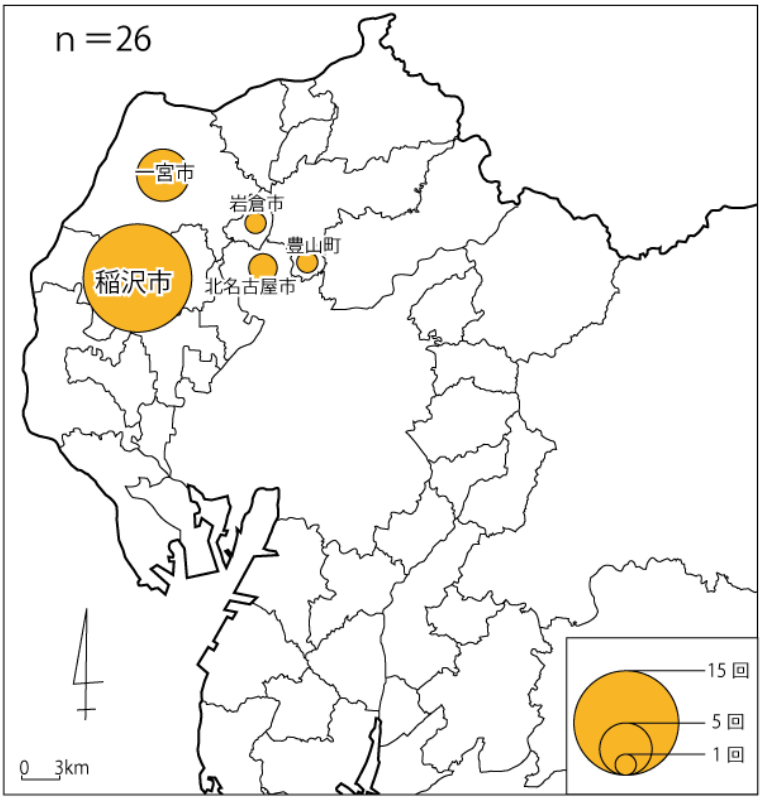
また，神事ではなく祭に関わる人々にも一定の変化があった。儺追神事は男性の祭であるため，女性はあまり関わってはいけないとされていた。加えて，昭和中期頃までは儺追神事の日には女性は家から出てはいけないという風潮もあったという。しかし，現在は警備も厳しくなり，祭の様子を女性や子どもたちも見物に来ることが可能である。このように時代とともに変化してきた儺追神事だが，1960 年以降にみられた都市開発，人口流入，市町村合併によるここ最近の神事としての形式的な変化はほぼみられない。

2.2　国府宮はだか祭の現在

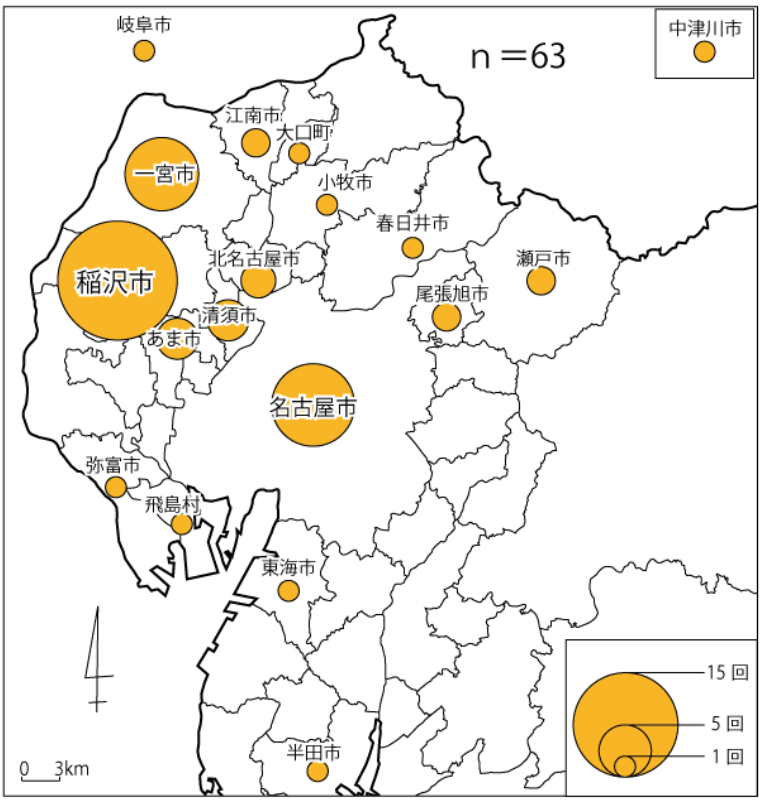
本節では，現在行われている国府宮はだか祭の流れについて，郷土資料や尾張大國霊神社国府宮の Web サイトなどを参考にしながら説明する。

国府宮はだか祭当日は，午前中から参拝者が国府宮神社に足を運ぶ。国府宮神社付近の道路には出店が並んでおり，国府宮神社周辺には数多くの人が集まってくる。午後になると各地域から裸男の団体が，裸にな

a）1933 ～ 1955 年



b）1956 ～ 2018 年



注）行政境界は 2018 年現在のものを用いた

図 7　大鏡餅の奉納地域（1933－2018 年）
（新修稲沢市史編纂委員会編（1991）および桜井（2008）を基に作成）

れない女性や子どもたちの名前などを記入したなおい笹を奉納するために，道路を歩いて国府宮神社まで訪れる（図 8)。そして，15:00 から国府宮神社内で神事が始まり，ますます多くの裸男たちが神社に集まってくる。こうして裸男たちの中で最後に小池正明寺の「手桶隊 [6]」がなおい笹の奉納に来ると，祭はクライマックスを迎える。手桶隊が水を撒き始めてからしばらくすると，儺負人が参道のある場所から出てきて儺追殿に向かって歩く。儺負人は厄などを負う人とされているので，触れて厄を祓うために，裸男たちはもみ合いになりながら儺負人に向かっていく（図 9)。その後，儺負人が儺追殿に入ると国府宮はだか祭は終了となる。

図 8　なおい笹を神社へ運ぶ裸男たち
（2018 年 2 月　藤井撮影）

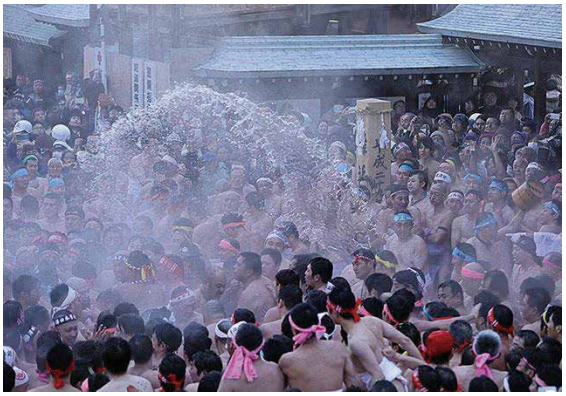


図 9　儺負人に向かってもみ合う裸男たち
（尾張大國霊神社国府宮 Web サイトより転載）

国府宮はだか祭には数多くの関連行事がある（表 1)。例えば，前日に毎年尾張地方の奉賛会の中の一つが 50 俵の大きい鏡餅を国府宮神社に奉納する「大鏡餅奉納」（図 10）や，国府宮はだか祭が行われた日の夜に行われ，神事の本義とされている「夜儺追神事」などがある。このように数多くの関連行事が現在まで規模を縮小することなく存続されている。このことから，国府宮はだか祭は神事としての意味を保持し続けたまま現在まで存続されてきた祭礼であると言える。

図 10　大鏡餅奉納の様子
（2018 年 2 月　藤井撮影）

また，国府宮はだか祭には裸男たちがなおいぎれ [7] やお菓子などを見物人の女性や子どもたち配ったり（図 11)，距離が近いため直接話すことができたりと，裸男たちと触れ合えるような場面がある。さらに近年では，国府宮神社のボーイスカウトや小池正明寺の子どもたちが祭当日の午前中に神社へなおい笹の奉納を行うといった，子どもたちが安全にはだか祭に参加できるような取り組みもされている（図 12)。このように，男性であれば誰でも裸男として参加でき，近年普通に参加できない女性や子どもでも裸男たちと触れ合うことができるようになったため，誰もが自由に祭を楽しむことができるというのが国府宮はだか祭の特徴のひとつと言えよう。

図 11　なおいぎれを見物人に配る裸男
（2018 年 2 月　藤井撮影）

第１表　国府宮はだか祭の関連行事一覧と 2018 年の日時

日付：旧暦	時間	行事名
2 月 17 日（土）：旧正月 2 日	9:00	儺追神事（はだか祭）標柱建式
2 月 17 日（土）：旧正月 2 日	10:00	儺負人（神男）選定式
2 月 21 日（水）：旧正月 6 日	9:00	大鏡餅餅米洗
2 月 22 日（木）：旧正月 7 日	5:00	大鏡餅餅搗
2 月 25 日（日）：旧正月 10 日	17:00	儺負人（神男）参籠
2 月 26 日（月）：旧正月 11 日	9:00	土餅搗神事並秘符認
2 月 26 日（月）：旧正月 11 日	9:00	大鏡餅飾付
2 月 27 日（火）：旧正月 12 日	13:00	大鏡餅奉納
2 月 27 日（火）：旧正月 12 日	19:00	庁舎神事
2 月 28 日（水）：旧正月 13 日	15:00	儺追神事（はだか祭）
3 月 1 日（木）：旧正月 14 日	3:00	夜儺追神事
3 月 1 日（木）：旧正月 14 日	8:00	大鏡餅餅切始
3 月 4 日（日）：旧正月 17 日	19:00	的射神事
3 月 11 日（日）	9:30	なおい茶会

注）なおい茶会は 1963 年から始まったため旧暦には存在しない。

（尾張大國霊神社国府宮 Web サイトを基に作成）

図 12　国府宮はだか祭に裸男として参加する子どもたち
（尾張大國霊神社国府宮 Web サイトより転載）

3. 国府宮はだか祭の運営基盤

国府宮はだか祭を運営するための組織として，「国府宮はだか祭実行委員会(以下,実行委員会)」がある。この実行委員会には，国府宮神社や神事と関連行事に関わる組織のほか，行政や病院や警察，民間企業，住民組織など幅広い分野の組織が所属している（表 2)。元々は警察との打ち合わせ会が行われていたが，そこにいくつかの組織が加わり連絡会となり，2014 年頃から警備会社や商業協同組合，観光協会などが加わって現在の形態となった。また，実行委員会は様々な祭で事故などが発生しているという現状を踏まえ，国府宮はだか祭をより安全に実施する目的で組織された。

ここでは，実行委員会に所属する具体的な活動内容について説明する。まず，神事や関連行事はすべて国府宮神社で行われている。神事に直接関わっているのは神社の他に，儺負人の OB 組織である鉄鉾会と和楽会である。鉄鉾会は儺負人のサポートや神事と関連行事の手伝いをし，国府宮神社に関わる建築関係者などから構成される和楽会も，大鏡餅やなおい笹奉納など神事に協力している。安全や事故防止の活動については，様々な組織が行っている。たとえば，稲沢市福祉課や稲沢市消防本部はけが人の手当てや救命活動を行い，稲沢市民病院も特別にけが人の受け入れ体制を整えている。また，警察や民間企業，住民組織によって警備や交通整理が実施されている。そして，広報活動については，国府宮はだか祭は多くのメディアが取材に訪れるため，稲沢市秘書広報課がメディアへの対応をしている。加えて，前章でも述べた通り，国府宮はだか祭は稲沢市の主要観光資源とみなされている。ゆえに稲沢市商工観光課や稲沢市観光協会が広報活動や問い合わせ対応などの役割を果たしている。さらに，国府宮はだか祭の開催当日は多くの人が集まるため，市民センターや稲沢市観光協会によって場所の提供や仮設トイレの設置が行われ，当日に並ぶ路店のため商業協同組合も活動をしている。このように，国府宮はだか祭を開催するにあたって，多くの組織が関わり合っており，官民協働で様々な役割を担っている。

しかし，実行委員会としての活動は会議を行う程度となっている。これらの組織は連携して実行委員会として活動するわけではなく，各組織が独立して活動を行っている。国府宮はだか祭はあくまでは神事であるため，運営そのものは国府宮神社が中心であり，他の

表 2　国府宮はだか祭実行委員会の概要と役割（2018 年）

組織名	役割	
国府宮権祢宜	神事	神事関係
国府宮鉄鉾会	儺負人のサポート，神事	
国府宮和楽会	大鏡餅，なおい笹奉納の手伝いなど	
稲沢市福祉課	けが人の応急手当など	救命，手当
稲沢市消防本部	警防（救命活動）	
稲沢市民病院	けが人等の受け入れ	
稲沢警察署	交通整理，警備など	警備，交通整理
名古屋鉄道	踏切の時間調整	
小正五区自主防犯パトロール隊	迷子案内，駐車場の整備など	
（株）コアズ	警備	
稲沢市秘書広報課	メディアの対応（許可を出すなど）	広報
稲沢市商工観光課	PR など	
稲沢市観光協会	PR，問い合わせ対応，仮設トイレの設置など	
小正市民センター	参道施設提供	その他
商業協同組合	的屋（路店）	

（聞き取り調査により作成）

組織は救命や警備，広報活動などを通して間接的にサポートを行っている。よって，国府宮はだか祭は各組織のサポートが必要なほど規模が大きい祭礼であり，また，運営に直接的なサポートを必要としていない余力のある祭礼であると言えよう。

4. 国府宮はだか祭に対する諸主体の意識

4.1　裸男としての参加者の意識

裸男たちは祭の当日，各地域からなおい笹を持参して国府宮神社に奉納する。神社に訪れる裸男及び参拝者の推移を見ると，参拝者の数は増減が激しく，天候などに左右されているのに対して，裸男は毎年 8,000 人から 10,000 人ほどが訪れていることがわかる（図 13）。希望すれば人は誰でも裸男になることができるが，毎年国府宮神社が裸男たちに参加するように呼びかけているわけではない。にも関わらず，裸男たちは自発的に国府宮はだか祭に参加し，国府宮神社に集まっている。そこで，裸男たちがどのような意識で国府宮はだか祭に参加しているか検討するため，2018 年 11 月から 12 月にかけてアンケート調査を実施した。対象者は国府宮はだか祭の裸男経験者，国府宮神社のボーイスカウトや鏡餅の奉賛会，手桶隊や稲沢市役所職員など計 95 人である（図 14）。回答者は 7 割以上が稲沢市民であり，その他の地域でも一宮市やあま市など稲沢市の近隣や尾張地方の住民である。

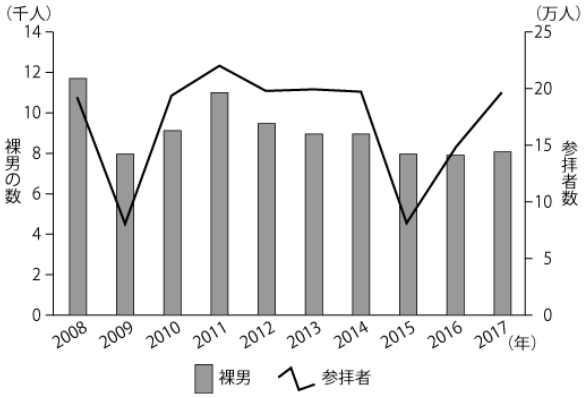


図 13　裸男および参拝者数の推移（2008－2017 年度）
（稲沢市経済環境部提供資料により作成）

裸男の経験者は必ずしも自身の居住地域から参加しているわけではない。他の地域もしくは団体には属さず個人的に参加したりしている人がおり，参加の仕方は多様である。また，図 15 と図 16 を見ると，回答者のうち 70 人以上が国府宮はだか祭を「地元だから昔から知っている」と答え，参加理由も半数以上が「地元の大きな祭りだから」と回答した。よって，稲沢市とその近隣地域の参加者は地元の大規模な祭であるために昔から知っており，参加もしている人がかなり多いものと考えられる。そして，毎年のように参加している人と過去に複数回参加した人の参加理由について比較すると，毎年のように参加している人は，7 割近く

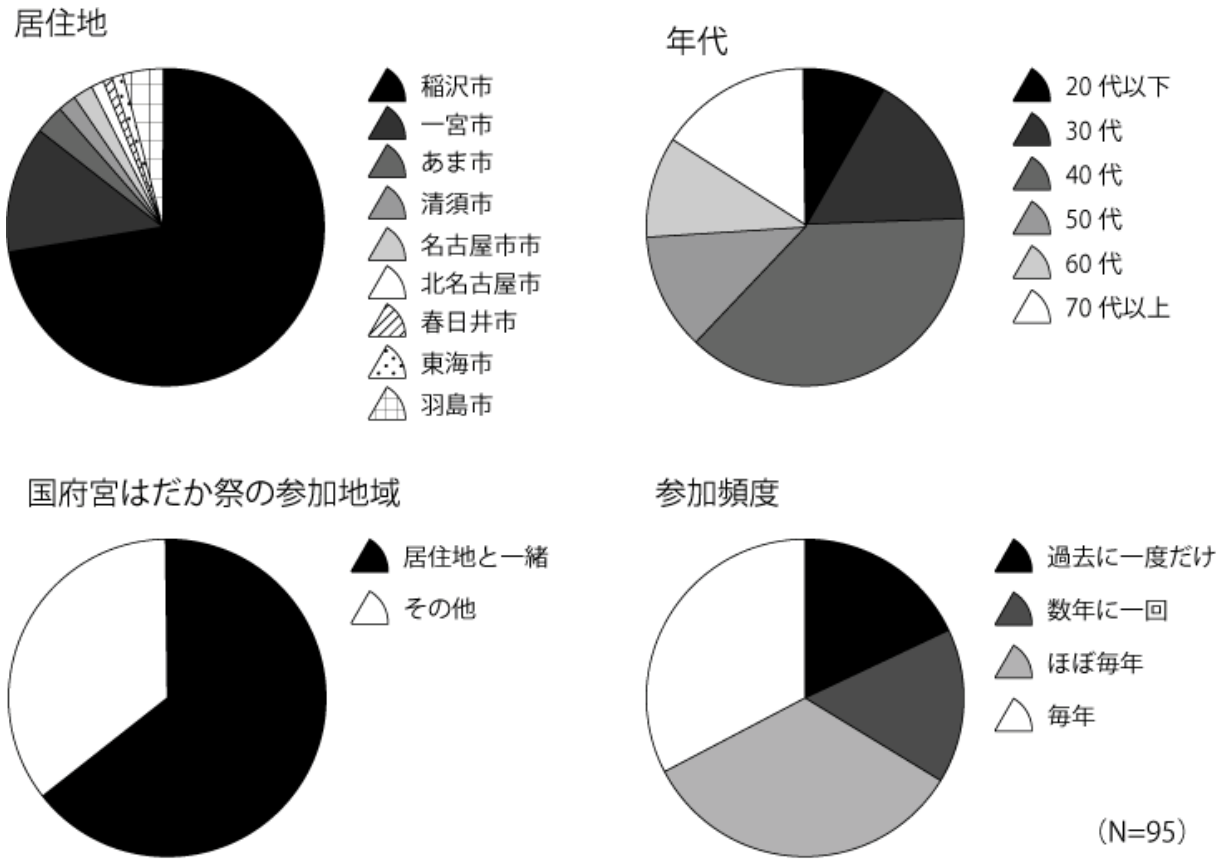


図 14　アンケート回答者の基本属性と参加頻度（2018 年）

（アンケート調査により作成）

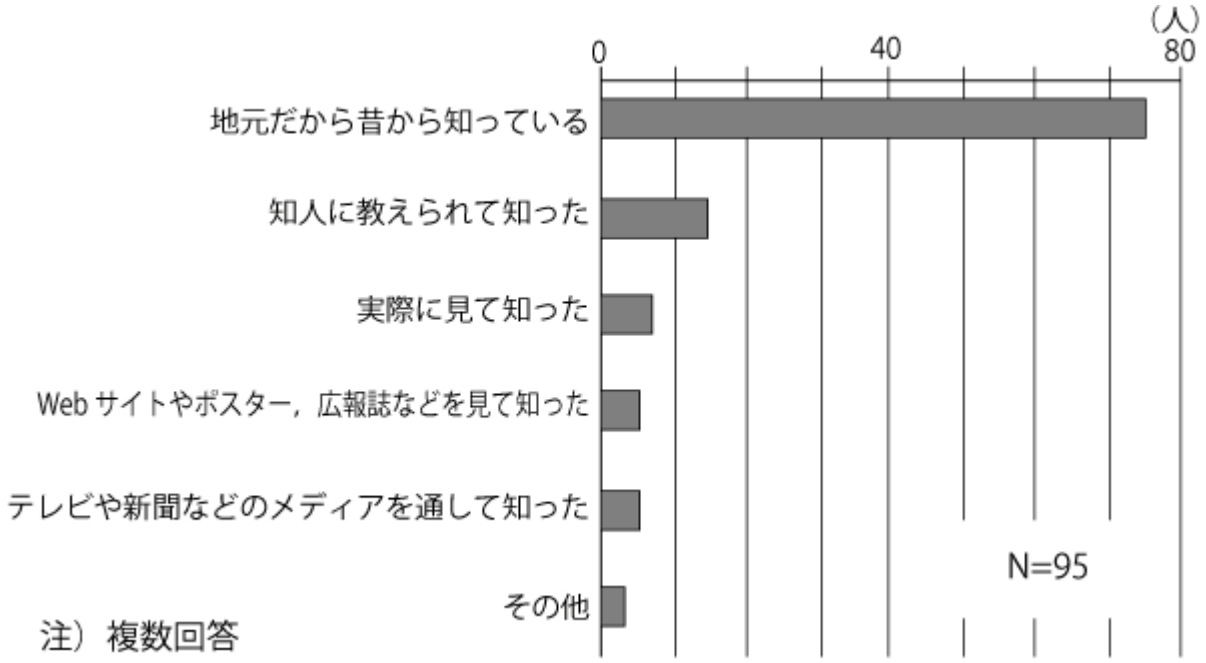


図 15　「国府宮はだか祭をどのように知ったか」の回答結果（2018 年）

（アンケート調査により作成）

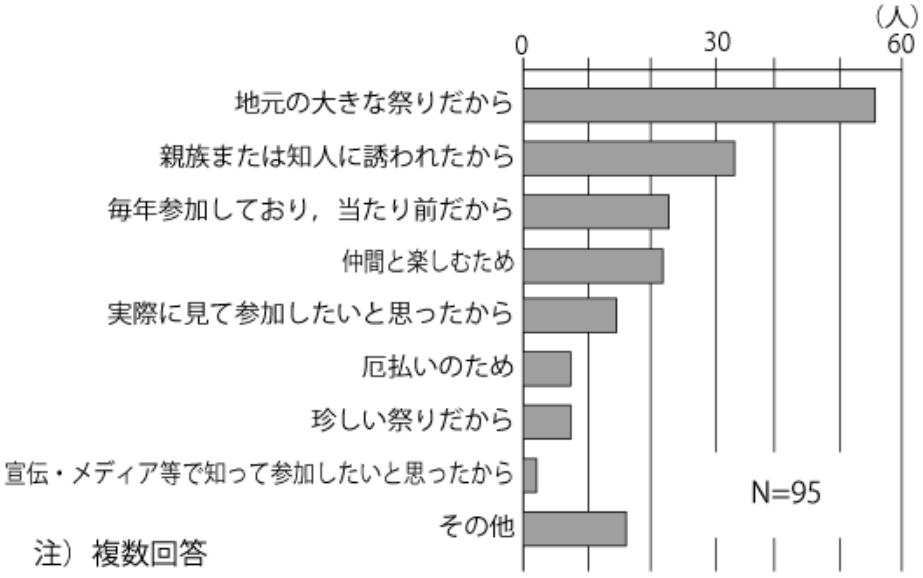


図 16　「国府宮はだか祭への参加理由」の回答結果（2018 年）

（アンケート調査により作成）

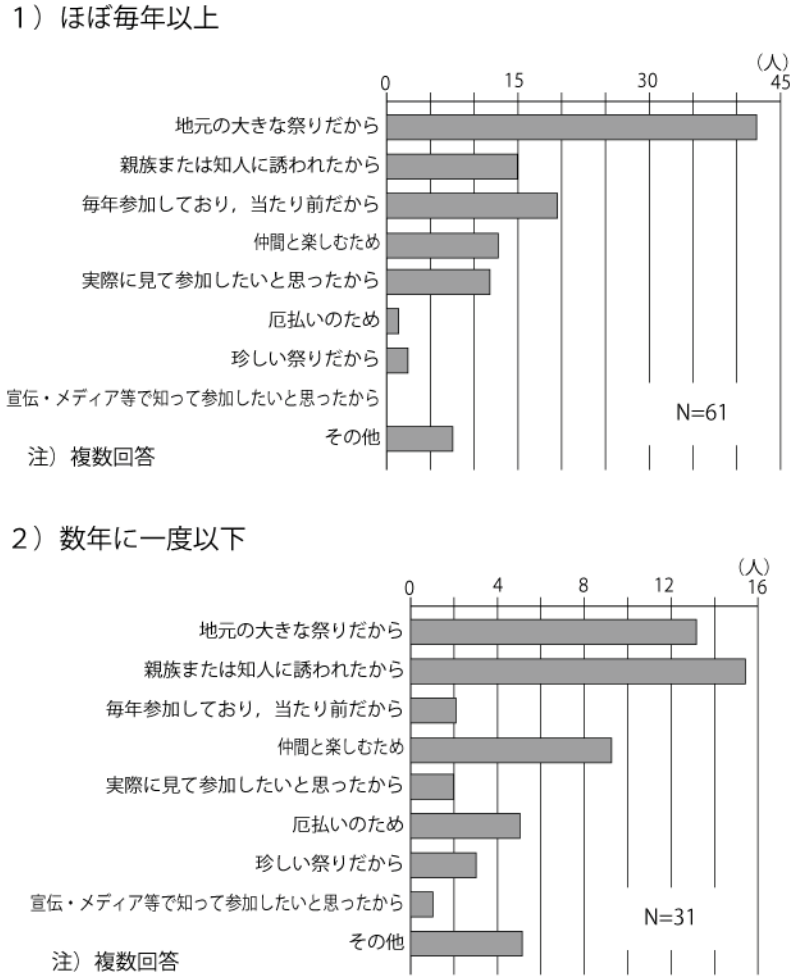


図 17　参加頻度別にみた国府宮はだか祭への参加理由（2018 年）

（アンケート調査により作成）

の人が「地元の大きな祭だから」と回答しており圧倒的に多い（図 17)。次いで,「参加するのが当たり前だから」という理由で参加している人が多数みられた。一方で，過去に 1 回から数回参加した人は「親族または知人に誘われたから」と回答した人が半数以上で最も多く，他には,「地元の大きな祭だから」や「仲間と楽しむため」と回答した人が 3〜4 割程度と比較的高い割合を示していた。また，厄払いのために厄年のみ参加したという人も数名確認された。また，参加頻度によらず,「珍しい祭だから」という参加理由の人は比較的少なく,「宣伝・メディア等で知って参加したいと思ったから」という人はほとんどみられなかった。「天下の奇祭」としてポスターに掲載されたりメディアに取り上げられたりしている国府宮はだか祭だが，稲沢市とその近隣地域の人にとっては，宣伝ポスターやメディアに取り上げられる「奇祭」というイメージより，昔から見てきた地元の大きな祭という認識が強いのではないかと推測される。

さらに，今後の国府宮はだか祭への参加意思についても訊ねた（図 18)。「もう一度裸男として参加しようと思うか」という質問に対しては，回答者の 7 割以上は「参加しようと思う」と回答していた。ほぼ毎年以上の頻度の参加してきた人は回答者のほとんどが「参加しようと思う」と答え，数年に 1 回以下の頻度で参加した人も半数以上は「参加しようと思う」と回答した。その理由については，主として地元の誇り，定例行事として参加することが当たり前というように参加理由と同様のものが多く，稲沢市とその近隣住民にとって国府宮はだか祭の存在感は大きいものと考えられる（表 3)。また，楽しさを感じている人や厄を落とせる気持ちになるといった人もみられ，一度参加してから祭に魅力を感じる人も少なくないと言える。さらに，20 代から 30 代の若い世代は回答者のほとんどが「参加しようと思う」と回答したのに対して，60 代以上は半数近くが「参加しようと思わない」と回答した。ただし，これは祭を否定するものではなく，年齢や体力的に参加できないという理由がほとんどだった。

そして，アンケートの最後に国府宮はだか祭の継承に対する意見を訊ね, 68 名から有効回答を得た（表 4)。その中でも, 特に 40 代以下の若年層は国府宮はだか祭の継承に対する意識が高く，自分たちで継続していきたいという内容の記述が数多く見られた。また，全体的な回答内容を見ると，続けるべきだと回答している人は,「楽しい祭だから」という理由よりも，むしろ稲沢市で継続されてきた「伝統的な祭礼であるから」残さなければならないと考えている。しかし，国府宮はだか祭はしばらくなくならないと考える人もいたが，参加者が減少しつつあることを感じている人も少なからずいた。そのような人は特に地元の若者がどんどん参加すべきだと考えているようであった。他にも，安全面や参加者の態度などに関して問題があると考えている人も確認された。加えて，参加している裸男たちの意識が神事からイベント化していることについて言及する人もいた。このように，大多数の参加者たちが伝統的な国府宮はだか祭を継承していくことが重要だと感じている中で，現在の国府宮はだか祭のあり方を問題視する人も若干名いた。

これらの結果から，毎年参加している人にとっては一年の節目の定例行事として，参加頻度の少ない人は知人との繋がりで参加する人が多いが，どちらも地元の伝統的で大きな祭に参加しようという意識によるものである。よって，伝統的な祭礼である国府宮はだか祭は稲沢市やその近隣地域の人にとって身近な存在となっていることがわかった。

4.2　国府宮はだか祭協力者の意識

国府宮はだか祭は, 規模の大きい特殊な祭礼であり，運営の他にも様々な面で地元住民による協力が必要となる。神事として毎年国府宮神社に鏡餅の奉納を行っている奉賛会，裸男になるために手伝いを行っている住民の方々など，個人でも団体でも様々な諸主体が国府宮はだか祭に関わっている。そこで，これらの人々がどのような意識で国府宮はだか祭に関わる活動を行っているか知るため, 2018 年 11 月から 12 月にかけて，鏡餅の奉賛会の方や裸男の家族で準備を手伝っている方などの国府宮はだか祭に協力する人々男性 33 名, 女性 4 名の計 37 名にもアンケート調査を行った（図 19)。

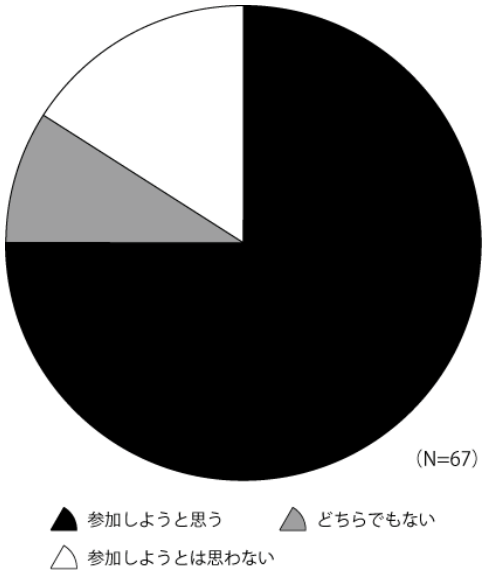


図 18　「もう一度裸男として参加してみようと思うか」の回答結果（2018 年）
（アンケート調査により作成）

表３　「国府宮はだか祭にもう一度参加したいかどうか」の回答結果（2018 年）

年代	参加意思	人数	その理由（一例）
20 代以下	○	8	参加するのが習慣であり，何らかの形で関わりたいから
			地元の誇りだから
			面白い祭りだから
			仲間や様々な人と触れ合うことが楽しいから
30 代	○	12	毎年の神事，定例行事だから
			参加するのが当たり前，義務だから
			家族としての生きがいだから
			地元の誇りだから
			すがすがしい気持ちになるから
	×	2	N.A.
40 代	○	18	参加するのが習慣になっているから
			参加するのが当たり前，義務だから
			地元の誇りだから
			家族の健康を願うため
			本厄だから
			仲間と盛り上がれて楽しいから
	△	3	誘われたら出るが，自分から出ようとは思わないから
			そろそろ見学する側にまわりたいから
	×	3	寒いし，危険だから
			厄年だけ出ると決めているから
50 代	○	7	毎年参加しているから
			地元の祭りだから
			ストレス解消になるから
	×	1	寒いから
60 代	○	4	１年が健康に始められ，厄を落とせる気持ちになるから
			体力が続く限り，毎年出たいから
	×	3	高齢のため
70 代以上	○	1	神男 OB（鉄鉾会員）だから
	△	2	健康次第
	×	3	高齢のため
			体力的に出られないから

注）○：参加しようと思う　　△：どちらでもない　　×：参加しようとは思わない　　（N=67）

（アンケート調査により作成）

鏡餅の奉賛会や鉄鉾会や個人的に国府宮はだか祭に協力している人々は，8 割以上の人がほぼ毎年以上参加している。また，活動の参加理由について「地元の大きな祭だから」と答えた人が半数以上で最も多い。次いで多いのは「仲間と楽しむため」，「親族または知人から誘われたから」と回答した人で 3～4 割程度いた（図 20）。「実際に見て，参加したいと思ったから」や「珍しい祭だから」という回答はどちらも 2 名しかおらず少なかった。そのため，国府宮はだか祭に協力する人は祭自体に興味をもっているというよりは，地元の大きな祭に関わる活動に知り合いなどと一緒に参加していると推測される。

他にも，協力者らにも継承についての意見を自由記述で回答を得た（表 5）。回答者はほぼ稲沢市と一宮市の居住者であり，国府宮はだか祭にマイナスのイメージを抱いている人はいなかった。伝統行事を継続してほしいという内容の意見が複数みられるため，協力する人も伝統的な祭礼の継承に対する意識が高いと言え

表４　「国府宮はだか祭にもう一度参加したいかどうか」の回答結果（2018 年）

年代	継承についての意見（一例）
20 代以下	地元の奇祭だから残していくべき
	伝統を絶やすと昔の人もこれからの人も困る
	これからも仲間を連れて参加して貢献したい
	継続はいいが，ケガは経てほしい
	若者が出ているのでなくなることはない
30 代	俗世と神が近く感じられる神事であるため，残さないといけない
	稲沢を知ってもらうためにも継承が必要
	若い人の参加が少ないので，もっと参加すべき
	日本人はイベント好きなため，これから盛り上がっていくのではないか
	メディアでも取り上げられるし，他地域の人も興味をもつため，なくならない
40 代	神事であるため継承は当たり前。今後も守り通していきたい
	古くから国府宮神社で引き継がれている祭事なので，未来永劫引き継ぐ必要がある
	誇らしいこと，ずっと継承してほしい
	なくならないと思うが，なくさないために，地元の人がもっと積極的に出るべき
	より安全に続けたい
	安全上問題があるとしても，危険だからといって伝統ある祭を規制しない方がよい
	たださわぐだけのお祭じゃなく，歴史伝統をかみしめて参加してほしい
	文化・伝統の継承は重要だが，別の視点から見れば，よっぱらいがあばれているだけ
	若い世代（子供）が参加しやすい環境づくり（歴史と伝統を小さいころに体感する場）が必要
50 代	古くからある祭だから長く続いてほしい。続けるべき
	宗教分離であり，中止も有
60 代	地元が根本であるため，地元の若い人が出ないと継承できない
	歴史があり，地域のためにもぜひ続けていってほしい 歴史があり，地域のためにもぜひ続けていってほしい。
	地元の伝統の祭りなので，大切にしたい
	深くは考えていない
70 代以上	30 年ほど前は，地元の裸男は神事としての意義を理解していたが，近年は稲沢以外からも裸男集団が参加するようになり，その中にはフェスティバル感覚で参加している人がいる。年々盛大になるのは喜ばしいが，伝統ある「まつりごと」だと如何にして理解してもらうかが今後の課題。
	昔ながらの祭りで，続けることはよいこと
	長く継承すべき祭

（アンケート調査により作成）

るだろう。回答者の多くが鏡餅の奉賛会の方であり，神事として関連行事に関わっているため，国府宮はだか祭は歴史ある祭礼だという認識がより強いのではないかと考えられる。そして，祭や関連行事に直接かかわらないが毎年祭に協力している女性たちは，若い世代の参加率の低さや参加人数の減少を問題視しており，より多くの若者に参加してほしいと感じていた。女性はあまり祭に直接的に関わらないため，祭を客観的に見て参加者の様子が少しずつ変化していることを敏感に感じ取れると推測される。また，若者の参加を求める人は子どもが裸男として参加しているため，若者の参加について強く望んでいると考えられる。

国府宮はだか祭に協力する人々は，他の地域に行ったり各地から様々な人が集まったりして活動することは少ないと思われる。そのため，自分の住んでいる地元の祭礼に関わるという意識が強く，毎年参加しているため，人とのつながりがより強くなっているのではないかと考えられる。また，協力者たちは自分たちの地域で行われる伝統的な国府宮はだか祭を継続していきたいという意識が強いが，協力している地元住民の中には若い世代の参加率の低さを問題視する人もいた。

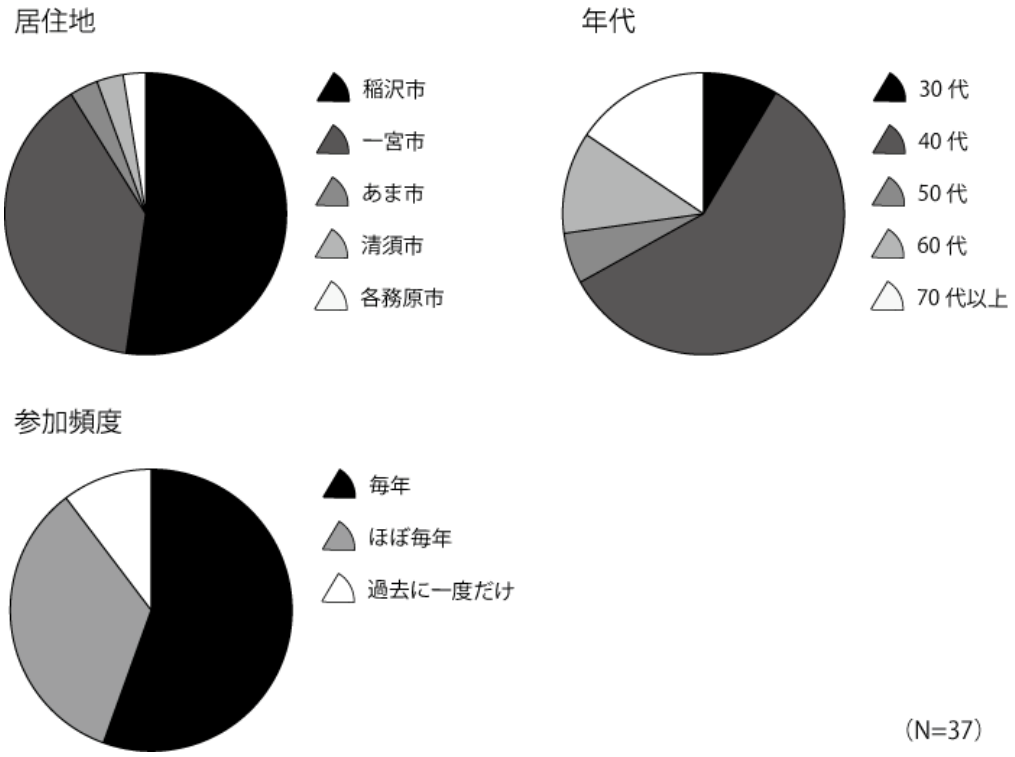


図 19　協力者の基本属性と参加頻度（2018 年）

（アンケート調査により作成）

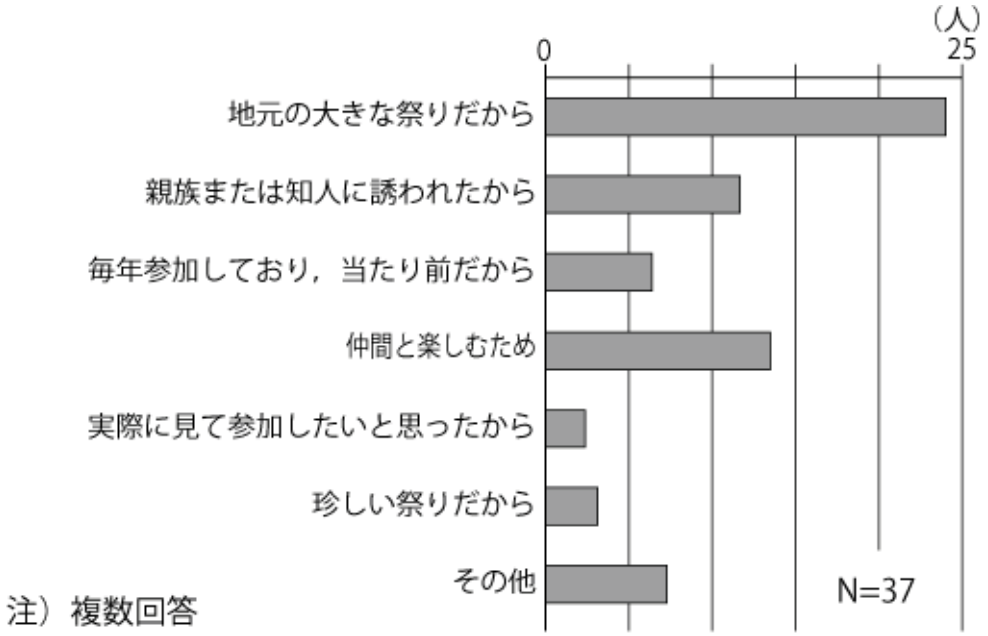


図 20　協力者の活動参加理由（2018 年）

（アンケート調査により作成）

表５　国府宮はだか祭に対する協力者の関わり方と継承への意見（2018 年）

年代	性別	関わり方	継承についての意見
30代	男	鏡餅の奉賛会	伝統ある行事を大切にしていきたい
30代	N.A.	仕事	今後も若い人に続けていってもらいたい
30代	男	鏡餅の奉賛会	無事故で継承してもらいたい
40代	男	鏡餅の奉賛会	伝統をいつまでも続けられるようにしたい
40代	男	鏡餅の奉賛会（厄年会）	歴史のある伝統行事を続けていくのは，地域の発展にもつながることなのでよいと思う
40代	男	神事の手伝い（1997 年神男）	ずっと続けていきたいし，続けてもらいたい
40代	男	鏡餅の奉賛会	良いことだと思う
40代	男	鏡餅の奉賛会	大切にすべき祭りだと思う
60代	男	鏡餅の奉賛会，裸男	継続してほしい
70代	男	鏡餅の奉賛会	末永く続いてほしい
40代	女	ボーイスカウトの活動（鏡餅の袋詰め）	小さい子たちがもっと参加すべき
40代	女	ボーイスカウトの活動（鏡餅の袋詰め）	小さい子の参加率が少ないので，祭を知らないまま大人になるのは寂しい
40代	女	ボーイスカウトの活動（鏡餅の袋詰め） 実家から出る裸男の手伝い	裸男になる人が減っているように感じて寂しい。節度をもって盛り上げたい
50代	女	鏡餅の奉賛会（家の手伝い）	歴史ある祭なので，若い人にも永年引き継いでいってほしい

（アンケート調査により作成）

4.3　国府宮はだか祭への協力活動

国府宮はだか祭に協力するために様々な主体が関わっていると述べてきたが，本節ではその中でも，独自で行われている活動例を二つ挙げる。

4.3.1　ビジネスホテル和洋館

ビジネスホテルの和陽館では，1990 年頃から国府宮はだか祭の参加希望者に対して裸男になるための手伝いをしている。当初利用する人は地元住民だけであったが，サービスの存在や内容が徐々に人々に広まっていき，現在では 400 人程度いるという。国府宮はだか祭は旧暦のため平日に行われることもある。そのため，毎年利用している人のほとんどは地元住民だが，県外や国外からの利用者もあるという。このサービスでは，国府宮はだか祭の当日に有料で裸男になるためのセット一式と弁当，加えて，宿泊部屋や入浴サービスなどを提供している（図 21）。裸男の準備の手伝いは他の施設でも行われていたこともあったが，現在まで継続しているのは和陽館だけである。準備の方法は社長や従業員が地元の人に教わり，国府宮神社や地元住民からの続けてほしいという要望によりここまで続けてこられたという。

図 21　和陽館による提供物一式

（和陽館提供資料を転載）

4.3.2　にわや

国府宮神社の向かいに立地する甘味処にわやでは，国府宮はだか祭当日に屋上の桟敷席を有料（現在は 6,000 円）で提供している（図 22）。1980 年以前から続けられており，現在の利用者は 150～200 人程度である。桟敷席は建物の上に人を数多く乗せるため基準が厳しく，採算が合わないという。そのため，昔は参道沿いの住居や建物に数軒の桟敷席があったが，2000 年代後

図 22　にわやの桟敷席
（2018 年 2 月　藤井撮影）

半頃からにわやのみとなった。遠方からの観光客による問い合わせがあるが，長年続けてきた方法を現在も継続しているので，桟敷席を利用するための券は店頭でしか購入することができない。桟敷席を今なお設け続けている理由として，店舗が神社の目の前にあり，長年桟敷席の提供をして当たり前になっているため，これまで続けてきたということだった。

また，にわやでは独自で国府宮はだか祭の裸男をモチーフにした飴や，12 月から国府宮はだか祭の時期限定で国府宮はだか祭せんべいなどの製造および販売しており，これらは国府宮はだか祭の当日にも観光客に向けて販売している。さらに店内には国府宮はだか祭の写真が貼られており，にわやにとって国府宮はだか祭は非常に大きな存在になっていると思われる。

5. 国府宮はだか祭の存続形態と存続要因

本章では，2 章で述べた国府宮はだか祭の概要と，3 章，4 章で検討した国府宮はだか祭に関わる諸主体の活動を踏まえ，国府宮はだか祭の存続形態とその要因について考察を行う。

5.1　国府宮はだか祭をめぐる主体間関係

国府宮はだか祭は，国府宮神社で儺負人を中心に行われている神事に裸男が集まってきて行われている祭礼である。希望した男性であれば誰でも裸男として参加することができ，神社が参加を促しているわけではないため，裸男たちは自発的に祭に集まってきている。裸男として国府宮はだか祭に参加している稲沢市やその周辺地域に住む人々のうち，参加頻度の高い人は地元の伝統的な祭礼であり毎年行われる恒例行事として，参加頻度の低い人は知人との繋がりや厄年に厄払いのために参加しているということがわかった。しかしながら，そのどちらも地元の大きな祭であるために昔から知っており，稲沢市で行われている伝統的な祭礼に関わっていこうとする意識のもとで裸男になって祭に参加していた。また，より遠方から参加する人々は，国府宮はだか祭が稲沢市の観光資源として「天下の奇祭」と呼ばれていることもあり，メディアを通して国府宮はだか祭の存在を知り，奇祭であるがゆえの「珍しさ」に関心をもつ傾向が強いと推測される。一方，国府宮はだか祭は稲沢市の参加者に楽しい恒例行事や厄払いの場，遠方の地域からの参加者に奇祭に参加する機会を提供しているという意味で双方向的であると言える。このような意識によって，祭当日，神社には各地から裸男として人が集まってくるのではないかと考えられる。

そして，祭を運営しているのは国府宮神社であるが，国府宮はだか祭のサポートとして多くの諸主体が関わり合っている。まず，国府宮はだか祭をサポートしている組織として挙げられるのは国府宮はだか祭実行委員会であり，行政，民間企業，住民組織などが属している。しかし，実行委員会といっても，これらの組織は連携して活動していることはほとんどない。また，祭の運営自体は国府宮神社だけで行うことができている。そのため，実行委員会に属する行政や民間組織や住民組織は，それぞれが警備や交通整理，救命，広報などの独自の役割を果たしながら官民協働で祭に関わっている。よって実行委員会に属する行政や住民組織は，国府宮はだか祭を安全に進めるためのこれらの活動は祭をサポートするとともに，裸男や地域住民たちも支えていると言える。また，これらの活動をしている行政や住民組織にとって，国府宮はだか祭は稲沢市を象徴する重要な地域資源となっており，特に稲沢市内の組織にとって，地元を活性化するために国府宮はだか祭が必要な存在になっていると考えられる。次に，裸男たちの準備を手伝っていたり店として裸男や国府宮はだか祭のためにサービスを提供したりしている数多くの地域住民たちが挙げられる。関わり方は様々だが，地域住民たちの多くは，裸男たちと同様に，毎年自分の住んでいる地域で行われている国府宮はだか祭に関わることが当たり前となっているために活動している。他方，裸男は地域住民たちになおいぎれを渡したり，住民たちの名前などを書いたなおい笹を奉納したりすることなどによって，参加しない住民の厄払いをも行う。また，地元住民たちにとっても，国府宮はだか祭や裸男は稲沢市を代表するものとなっているだろう。さらに，各地の鏡餅の奉賛会など祭だけでなく神事や関連行事に関わっている主体も存在する。鏡餅の奉納は稲沢市の近隣地域ではなく，尾張地方の中でも国府宮神社から少し離れた地域からも毎年のように行われている。しかし，その中でも毎年奉賛会の活動に参加しているという人もみられた。鏡餅の奉納とい

う神事としての意味が強い行事に関わっている意識や，恒例行事であるため仲間とのつながりの強さによると考えられる。

このようにして，国府宮はだか祭はその規模の大きさから様々な主体が関わっている。その根底には，稲沢市と尾張地方の地域的特徴があると考えられる。稲沢市は大都市近郊に位置しており，若干の人口増加がみられている。また，稲沢市には数多くの文化財が存在し，それらに関連した教育に高い関心が寄せられている。そして尾張地方は，国府が稲沢市に置かれていたため，かつての中心は稲沢市だったという歴史がある。また，尾張地方の地域の多くが名古屋大都市圏に含まれており，人口が増加も見られ，比較的若年層の割合が高くなっている。そのため，尾張地方の各地から伝統的な祭礼である国府宮はだか祭に関わっており，若年層も少なくないため担い手の心配が現状ではそれほどない。このような地域的特徴から，稲沢市で行われている国府宮はだか祭には多くの諸主体が関わっていると言えるだろう。

5.2　国府宮はだか祭の存続要因

本節では，国府宮はだか祭がなぜ現在まで存続されてきたのか，その要因について考察する。

まず，国府宮はだか祭は，一年に一度だけ下帯姿で人々の中を歩く非日常的な経験ができる祭である。また，参加者は決まっているわけではなく，男性の希望者であれば誰でも参加することができる。さらに伝統のある神事であり一年の厄を払うことができる行事という認識をもたれつつ，人が多く集まるために知人や友人の他にも様々な人と楽しめるイベントのようにも思われている。このような国府宮はだか祭の特殊さから，毎年裸男として参加する人々が集まるのではないかと考えられる。

次に，国府宮はだか祭は各地から裸男たちが集まってくるため規模の大きい。そのため，稲沢市内の様々なところに国府宮はだか祭のデザインが使われたり，市内の小中学校や施設などが休みになったりしており，市民にとって子どものころから親しみのある祭である。そして，大きな観光資源の少ない稲沢市にとって，国府宮はだか祭は稲沢市を象徴するような存在となっている。ゆえに，稲沢市民は国府宮はだか祭を地元の誇りと強く感じており，規制されることなく今後も存続してほしいと願っており，何らかの形で祭りをサポートする人が多い。そのため，いくつもの諸主体が関わりあいながら祭礼が存続してきたと示唆される。

加えて，稲沢市の地域的特徴も要因の一つとして捉えることができる。前章で述べたように稲沢市は名古屋大都市圏に含まれているため人口減少はみられず，現在は担い手不足がそれほど深刻ではない。そして，稲沢市はかつて国府が置かれ尾張の中心だったということもあり，文化財の数が多く，子どもを対象とした文化財教育にも積極的である。ゆえに幼少期より地域の文化や伝統に接する機会に恵まれており，文化財を地域の誇りとして捉える意識が身につくのではないかと推測される。

国府宮はだか祭に参加する裸男の多くは稲沢市やその近隣地域の住民である。稲沢市やその近隣住民にとって国府宮はだか祭の存在感は非常に大きく，彼らは様々な思いをもちながら裸男として祭に参加したり積極的に協力したりしている。また，国府宮はだか祭は特殊な祭であるため,集客圏は比較的広域的である。このような要因から国府宮はだか祭は存続されてきたのではないだろうか。

6. おわりに

本研究では、愛知県稲沢市の国府宮神社で行われている国府宮はだか祭を取り上げ，当該地域の社会背景を踏まえつつ，祭礼と諸主体との関わりを分析することを通して、国府宮はだか祭の存続形態を明らかにし，存続要因を導出した。本研究を通して得られた知見は以下のようにまとめられる。

国府宮はだか祭は神事として現在まで存続されている伝統的な祭礼であり，直接運営しているのは国府宮神社のみである。しかし，国府宮はだか祭にはその規模の大きさから，裸男の他にも，行政や民間企業を含む住民組織，地元住民など様々な諸主体が自分から活動し関わり合っていた。そして，その多くが，地元の大きな祭であり毎年行われている定例行事として活動していた。このようにして存続されている要因として考えられるものを三つ挙げた。一つ目は，年に一度の非日常的な経験が誰にでも味わうことができるという国府宮はだか祭の特殊性である。二つ目は，観光資源の少ない稲沢市にとって，国府宮はだか祭が市を代表する重要な地域資源となっているというその象徴性である。三つ目は，名古屋大都市圏の一都市であり人口減少があまり見られず，また若い世代が文化財の多い環境で育ってきたことなど稲沢市の地域的特徴である。これらのことから担い手不足がさほど深刻に問題視されず，国府宮はだか祭は現在まで規模を縮小することなく存続されてきたと考察した。

しかし，近年では全国的に人口減少が問題視されており，今後はどの地域においても伝統的な祭礼などの文化の担い手確保について考える必要がある。稲沢市においても，今後は人口が減少していくと予想されているうえ，調査の中で，国府宮はだか祭の裸男として

の参加者の減少や若者の参加率の低さを感じている人が数人見られた。本研究において行ったアンケート調査の中で，国府宮神社のボーイスカウトに属し幼少期から国府宮はだか祭に関わっている若者は，自分たちが継続していきたいというように国府宮はだか祭の継承に対する意識が高いという例が見られた。そのため，今後は稲沢市でも，子どもの頃から国府宮はだか祭のような地域の伝統文化に触れられるような取り組みがさらに求められるだろう。

本研究では，社会変動の大きい大都市近郊で神事としての意味を失うことなく存続されている伝統的な祭礼の継承を考える上で，祭礼と様々な諸主体との関わりを分析して存続形態を明らかにすることの有用性が示された。既往研究と比較し，本研究では祭礼に関わるより幅広い諸主体の活動実態について言及することができた。だが一方で，次のような課題も残った。稲沢市と近隣地域の人は地元で行われる規模の大きな国府宮はだか祭への意識が高く誇りをもっているといった趣旨のことを述べた。しかし，インフォーマントの多くは稲沢市とその近隣地域の人のみであり，鉄鉾会や奉賛会など役職のある国府宮はだか祭に距離が近い人が中心であった。よって祭との接点があまりない地元住民や新規住民などが国府宮はだか祭に対してどのような印象を抱いているか，すなわち混住化に関わる点は本研究で言及することができなかった。今後の課題として，様々な境遇の地元住民が地域の祭礼をどのように捉えているのか，またどのように関わっているのかなど，より幅広い視点から祭礼の継承について議論する必要がある。

付記

本稿の作成にあたって，稲沢市経済環境部商工観光課主任の佐藤陽介様，稲沢市教育委員会生涯学習課主幹の水野博雄様，稲沢市観光協会事務局長の古川正美様，尾張大國霊神社権禰宜の角田成人様，山田テント商会の山田和義様，お宿和陽館・ビジネスホテルワコー代表取締役の酒井章治様，にわやの従業員の皆様には大変お世話になりました。また，国府宮スカウト育成会や各地の奉賛会，小正五区消防団，稲沢市役所職員の皆様，セプト株式会社・有限会社伊藤塗料店代表取締役の伊藤正征様をはじめとする地域住民の皆様にはアンケート調査にご協力いただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。なお，本稿は藤井が 2018 年度に三重大学教育学部へ提出した卒業論文をもとに，磯野が加筆修正したものである。本研究の遂行に際し，JSPS 科学研究費補助金（若手研究，19K20566，研究代表者：磯野　巧）の一部を使用した。

注

1）稲沢市経済環境部商工観光課提供資料による。

2）尾張大國霊神社国府宮 http://www.konomiya.or.jp/
（最終閲覧日：2019 年 7 月 23 日）

3）2018 年は 2 月 28 日開催

4）「神男（しんおとこ）」とも呼ばれる。

5）この時代の資料は残っていないため詳細は不明だが，1501 年の記録には儺追神事に関する記録が残されていることから，室町時代には儺追神事が行われていたと判断できる。

6）小池正明寺一帯の裸男たちは「手桶隊」と呼ばれており，裸男たちのもみ合いの際に，桶に水を汲んで撒いていくという役割がある。これは儺追人や裸男たちが身動きできるように，儺追人が裸男の下帯から垂れる水を飲むため，儺追人が通る道を開くためといった理由からである。

7）厄除けのお守りとされる布のことである。神社で販売しているものもあるが，ここでは裸男が持っており，引き裂いて見物人に配るもののことを指す。

引用文献

稲沢市編（1968）:『稲沢市史』稲沢市.

卯田卓矢・阿部依子（2015）: 過疎地域における祭礼の存続形態―佐久市望月地域の榊祭りを事例として―．地域研究年報，37，33-59.

遠城明雄（1992）: 都市空間における「共同性」とその変容―1910～1930 年代の福岡市博多部．人文地理，44，341-365.

坂本優紀・石坂　愛・武智玖海人・周　安琪・岩井優祈・篠原弘樹・白　奕佳・松井圭介（2018）: 地方都市における祭礼の変容―土浦八坂神社祇園際における氏子の対応に着目して―．地域研究年報，40，51-74.

桜井孝勝（2008）:『国府宮の歴史と祭り』桜井孝勝.

佐藤弘隆（2016）: 京都祇園際の山鉾行事における運営基盤の再構築―現代都市における祭礼の継承―．人文地理，68，273-296.

新修稲沢市史編纂委員会編（1991）:『新修稲沢市史下』新修稲沢市史編纂委員会事務局.

平　篤志（1990）: 東京都千代田区神田地区における人口減少に伴うコミュニティの変容．地理学評論，63，701-721.

新田浩延（2000）: 常陸総社宮例大祭の空間構造―住民の参加形態を指標に―．茨城地理，1，3-16.

柳田国男（1956）:『日本の祭』角川書店.

渡辺康代（1999）: 近世城下町における祭礼の存続形態―下野国那須郡鳥山を事例として―．地理学評論，72A，423-443.